# チャペル週報

そこで、王は答える。
『はっきり言っておく。わたしの兄弟である
この最も小さい者の一人にしたのは、わたし
にしてくれたことなのである。』

（マタイによる福音書25:40）

秋季宗教運動特集号
2011.10.10.～10.14 No.16
関西学院宗教センター

## ☆チャペル・スケジュール☆

時間 10:35～11:05　　場所 各学部チャペル

10月10日(月)
**神** 小　野　　歩（神4）
**経** 舟　木　　譲（宗教主事）
**人** 嶺　重　　淑（宗教主事）
**聖和** 聖書物語「歌う人」

10月11日(火)
**神** 阪　口　　新（M1）
**文** アンドレアス・ルスターホルツ（宗教主事）
**社** 一歩スマイルプロジェクト東日本大震災復興夏ボラ報告　聖和大学教育学部学生有志
**法** 栗　林　輝　夫（宗教主事）
**経** 上ケ原ハビタット
**商** English Chapel　Christian Morimoto Hermansen（宣教師）
**国** Martin Collick（国際戦略本部顧問）
**聖和** 益　田　　博（千刈キャンプ主任)
**総** 鎌　田　康　男（総合政策学部教授）

10月12日(水)
**神** 神　田　健　次（神学部教授）
**社**「いのち」をめぐって④ 對　馬　路　人（社会学部教授）
**法**「貧困をなくそう」Christian Morimoto Hermasen（宣教師）
**経** English Music Chapel Timothy Dale Boyle（宣教師）
**商** 海外での奉仕を考える　上ケ原ハビタット
**人** 小　野　　輝（神学部Ｍ１）
**国** 平　林　孝　裕（宗教主事）
**聖和**「はやくはやくっていわないで」小山　顕（聖和短期大学専任講師）
**理** 小　林　昭　雄（名誉教授）
**総** 村　瀬　義　史（宗教主事）

10月13日(木) **大学合同チャペル　10：20～11：20**
西宮上ケ原キャンパス　会場：中央講堂
平田　義(社会福祉法人イエス団愛隣館研修センター所長)「いのちの多様性」
西宮聖和キャンパス　会場：メアリー・イザベラ・ランバスチャペル
川上　盾（東神戸教会牧師）「共にパンを分かち合うとき」
神戸三田キャンパス　会場：Ⅵ号館101号教室
ジェフリー・メンセンディーク(米国合同教会宣教師・日本キリスト教団東北教区センター主事)「寄り添うわたし、寄り添われるわたし」

10月14日(金) **大学合同チャペル　10：20～11：20**
西宮上ケ原キャンパス　会場：中央講堂
ジェフリー・メンセンディーク(米国合同教会宣教師・日本キリスト教団東北教区センター主事)「寄り添うわたし、寄り添われるわたし」
西宮聖和キャンパス　会場：メアリー・イザベラ・ランバスチャペル
吉見　真希(聖和大学人文学部卒業生)「今、この瞬間に」
神戸三田キャンパス　会場：Ⅵ号館101号教室
平田　義(社会福祉法人イエス団愛隣館研修センター所長)「いのちの多様性」

◇ランバス早天祈祷会　毎金曜日　午前8：20～8：40 於：ランバス記念礼拝堂(上ケ原)
10月13日(木)宗教運動のために　　永　田　雄次郎
10月14日(金)宣教師の働きのために　　Eun　Ja　Lee

# 「命の重さ」

平　田　　義

私は今、京都市伏見区向島において様々な障がいのある人たちと日々出会っています。その出会いの中で日頃感じていることをご紹介させていただきます。

重症心身障がい者と言われるＫくん（27歳）。彼は、重度の身体障がいと知的障がいのある方でなおかつ医療的ケア（痰の吸引が常時必要、気管支拡張剤の吸入、胃に直接管を通しての経管栄養剤の注入など）が必要な方です。

彼とのそもそもの出会いは今から11年前、彼が高校2年生の春先でした。その前年、「向島障がい児者地域支援センター『遊隣』」の準備会を開きました。その席上で私の正面に座る一人のお母さんが会議の間ずっと斜に構えて私の方を訝しげな眼差しで見ていました。会議が終わりに近づいた時その方はおもむろに手を挙げて発言なされました。

「ちょっと平田さん、あなたはどんな障がいのある人でも受け入れるて言うたけど私の横に座ってるこの人の息子さんは痰の吸引が必要な子なんやそんな子でもあんた受け入れるのか！」と、鋭い口調で私を問い質しました。私は正直、その時点では痰の吸引とはどういったものなのか全く知識がありませんでした。ですが、次のように答えました。「お母さんがやっておられることですよね。そしてそのお子さんが生活していく上で必要なことなんですよね。それならばお母さん、僕たちに教えてください。」と、医療的ケアのことなど何も知らない強みで答えてしまったのです。

この言葉がきっかけとなって私はＫくんをはじめとするいわゆる医療的ケアを必要とする人たちと出会ったのです。

まずお母さんたちと一緒に食事会を開きました。管から栄養剤を入れる人ばかりでなく、口からミキサーで砕いた食事を摂取する人もおられました。私たちがひとくち口に入れるだけでゴホゴホと大きくむせる人たちでした。食事を楽しむという風景とはほど遠く、介助する側もされる側も緊張感で汗だくになっているというさまでした。それは食事を摂ることによって逆に体力を奪われている様にさえ思われました。

いよいよ食事の練習も最後の日、その食事会にずっと参加してくださっていた私の友人である看護師が、「平田くんやめときって。絶対危ないから」と私を諭すように言ってくれました。しかしもう今更後戻りはできない。どれだけ重度の障がいがあろうともその人たちが社会に参加することを阻む権利は誰にもない。いや逆にそのような人たちだからこそ社会に出ていくことに意味があるのだと自分自身に言い聞かせていました。それはおそらく心の奥にある怖いという気持ちをかき消すための強がりだったかもしれません。

その後、支援学校を卒業したＫくんをはじめとする医療的ケアが必要な方々が、私たちのセンターに通ってくることになりました。

この間のＫくんたちとの出会いから教えられたことの一つは「命の重さ」ということです。彼らは日々死と隣り合わせで精一杯生きています。彼らと同じような障がいのある人たちの中には、昨日まで元気に笑顔を見せていた人が原因不明の突然死するような例も少なくありません。だからといって医療設備の整っ

た病院の中だけで過ごすのではなく、毎日毎日いろいろな刺激を受けながら地域の中でかけがえのない自己実現をしながら共に生きていくことこそが、「生きている」という証になるのではないでしょうか。

福祉の父と呼ばれた糸賀一雄さんは重症児の人を指して次のように言われました。「この人を世の光に」この意味は彼らこそがこの世の中を明るくする、また変革する力を持っているのだということを示したものです。まさしく命が軽んじられている今の時代において、彼らが「命の重さ」を私に日々教えてくれています。

（社会福祉法人イエス団愛隣館研修センター所長）

---

# 共にパンを分かち合うとき

川　上　　盾

教会には「聖餐式」という儀式があります。イエス・キリストと弟子たちとの「最後の晩餐」が原型となり、そこから整えられていったのが聖餐式です。キリストの身体を食べ、キリストの血を飲むという位置づけのこの儀式が、教会の中で大切な営みとして受けつがれていったことは事実です。しかし、初めに聖餐があったわけではありません。イエスと人々との共なる食事は「最後の晩餐」だけではない。実に様々な共に食事をする関わりが聖書には記されているのです。

イエスと、人々との出会い・交わりは、食事という最も日常的な営みを通して持たれました。共に食事をするということは、共にいのちを分かち合うことだったからです。イエスは徴税人、遊女、罪人と呼ばれた人たち、エリートの律法学者からは「共に食事をする資格のない人」と言われていた人とも、共に食卓を囲みました。彼らもまた神の国の一員だったからです。一方で人を差別し、優劣を決めつけ、貧者・弱者を軽んじる人には、厳しく悔い改めを迫りました。そのような姿は、神の国から最も遠いものだったからです。

貧しい人とだけではありません。ザアカイのような金持ちとも食事を共にされました。どんな人も与えられたいのちを喜び祝う交わりに招かれている ...。そのことをイエスは示されたのです。

「五千人との共食」という出来事があります。五つのパンと二匹のさかなをみんなで分け合ったところ、「男五千人」が満腹したと記されています。男だけだったのでしょうか？まさか。その２倍、３倍の、女性や子どもたちを含む人々が、共にパンを魚を分かち合ったことでしょう。

これが「主の食卓」です。それは開かれた食卓であり、出会いの食卓であり、分かち合う食卓でした。神さまに与えられたいのちと食べ物、それを互いに喜び祝う食卓でした。しかしただ楽しいだけの快楽的な食卓ではなかった。そこに参加する者に少しの反省をうながし、自分勝手な生き様を作り変え、共に生きる生活を生み出す。そんな食卓でもありました。

だからこそイエスに出会った人たちは、イエスが天に帰られた後も、食事の度

にイエスを想い起こし、パンを分かち合い盃を共に交しながら、イエスに従って新しく歩む道を目指していったのです。

ルカによる福音書には、復活したイエス・キリストと二人の弟子とが「エマオ」という村に向かう道で出会う場面が記されています。最初弟子たちは、共に歩むその人がイエスだとは気づかなかった。しかしエマオに到着し、共にパンを分かち合ったとき、その人が復活したキリストだと気付いたのです。その瞬間「イエスの姿は見えなくなった」と記されますが、二人は「道の途中でお話しを聞いていた時、私たちの心は燃えていたではないか」と語り合います。「心が燃えるような体験」、それがそれ以後、この二人の弟子の歩みを支えていったことでしょう。そんな気づきを与えたのが「共にパンを分かち合う」という行為であった。これはとても大切なことだと思うのです。

2000 年前のイエス・キリストの物語。そこにあったのは共にいのちを喜び祝い、共にいのちを分かち合う、そんな「主の食卓」でした。「いのちを祝う」ということが簡単にはできない、難しいと思える中でも、それでも限られたものを分かち合い、思いが満たされる、そんな食卓でした。その「主の食卓」を共に囲む豊かさを知る者は、必ず共に生きる生活へと導かれていくことを信じたいと思います。

（東神戸教会牧師）

---

# 希望を運ぶ自転車隊

ジェフリー・メンセンディーク

今、東北は呻いています。深い、言葉にならない呻きがあります。この半年間、沢山の人が東北を訪れ、手を差し伸べてくださいました。本当に感謝です。しかし、呻きは消えません。明るい話題も聞こえてきますが、それは深刻な生活難を背景としていることを忘れてはなりません。

私は仙台市にある日本キリスト教団東北教区センター・エマオというところの被災者支援センターに関わっています。震災直後からここが一つの情報基地となって、全国の方々の想いをつなげて行く活動が展開されてきました。今は、全国からのボランティアを受け入れ、宿泊先や食事を提供しながら、毎日被災地へと若いボランティアたちを送り出しています。ボランティアたちの声は公式ブログ http://amba.to/tohokuuccj で見ることができます。

初動から私たちは小さな規模で継続的に寄り添って行くことを目指してきました。一日のキャパシティーは 50 名。小さくても続けて行くことに意味がある。急がず、丁寧に、心を持って続けて行きたいと願ってきました。この趣旨に賛同して、学生を毎週 3 人づつ送り出して下さるキリスト教主義大学もあります。沖縄から北海道まで、沢山の若い人が毎日のようにエマオにやってきます。本当に励まされています。

毎朝、エマオからボランティアたちは自転車で出かけます。被災した沿岸部ま

で片道 13 キロ。私たちは初めのころから自転車で向かっています。電気、水、ガス、ガソリンが手に入らなかったころ、スタッフは自転車で避難所を回りました。ある避難所でスタッフの N 牧師は被災者の S さんに声をかけました。「私たちは希望を探しています。若い人たちとその希望を分かち合いたいのです。S さん、助けて下さいませんか。」この言葉が S さんの心をとらえました。避難生活をしていた S さんは町内の少年野球の会長であり、若い人が好きでした。N さんと S さんの出会いがきっかけとなり、私たちは仙台市若林区七郷にある笹屋敷という集落と関わるようになったのです。この半年間、沢山のボランティアが入れ替わり立ち代わり足を運んで、泥出し、瓦礫の片づけ、家の清掃、畑の汚泥集め、墓地整備、側溝堀り、草刈りなどのワークをしています。一人一人の力は小さいものです。しかし、毎日続けて行くことで七郷の方々の生活は少しづつ回復に向かっています。

エマオから出かけて行くボランティアを見送りながら私は「ありがとう。よろしく！」と声をかけます。最初は不安そうな表情で漕ぎ出して行くワーカーが、一日の労働を終えて戻ってくると本当に変わっています。そうやって、みんなの小さい存在が、毎日の被災地での出会いを通して意味を与えられ、変えられて行くのです。被災地もそうであるように、若い人たちもこの出会いによって希望を与えられているのです。こうして、毎日寄り添うエマオの活動が続けられています。家が綺麗になって、生活が戻ったとしても、私たちは顔を出して、被災した方々に声をかけて行きたいと思っています。自転車で被災地に通うのは効率的ではないかも知れません。けれど、私たちは単なる労働力を提供しているのではなく、寄り添う心を運んでいるのだと自負しています。ボランティアたちは日々希望を被災地に運んでいるのです。

「よろしく！」と声を掛け合いながら、一人の力がより大きな力とつながっている実感を深めています。一人が一人へ「よろしく」と言ってバトンを渡して行く毎日の営みが被災地の方々の呻きを緩和し、希望へと変えて行く力となるのです。

聖書に「神はその民の呻きを聞いた。」（出エジプト記）とあります。今、日本中の人が送り出されているときです。希望を被災地に運んで行くために、あなたも東北に来て手を貸してみませんか。神様は今、いろんな形で東北に希望を運んでくださっています。その希望のしるしは、実はあなた自身でもあるのです。

（日本キリスト教団東北教区センター・エマオ　主事、米国合同教会宣教師）

---

# 今、この瞬間に

吉　見　真　希

私達は今、息をしています。息をしているという事は生きているという事です。では、今、この瞬間、あなたはどのように生きていますか？

私は大学生活を通して、それまで全く考える事も感じる事も無かった「現実の

この世界」で、今この瞬間に何が起こっているか、その同じ瞬間に、私は自分の場所でどれだけ自分中心で自己満足だけの生活を送っているかを思い知る事ができました。地球上の大半の人々は貧困と選択肢の無い人生を送り、「満腹」を経験した事が無い、学校に行けない子供や大人達です。そして戦争や開発事業のせいで、家族や友達が犠牲になったという多くの人々。それは他人事でも他国の事でもなく、私達一人ひとりの生活に繋がっている・・それが真実です。それを知った私は、自分だけが幸せになるのではなく、皆で笑い合って過ごしたい。その為には見返りを求めず、今、この時点で大小関係なく自分にできる事をひとつひとつ大切に、愛情込めてやっていこう、そうしたら皆が笑い、皆が笑うと私も笑える。幸せに繋がる。そして自分・家族・他人という境界線を引くのではなく、私が自分や家族を愛するように、友達も会社の人も通りすがりの人も皆を愛することができれば、戦争や貧困、迫害は無くなるのではないか。そう考えました。

東日本大震災が起こった時、私は母を看病する為に、神戸の実家に戻っていました。そして母は「私が行けない分、あんたが行ってきて」と私を送り出してくれました。被災地は、戦後のような風景がだだっ広く筒抜けに見られました。ボランティア仲間には、「私は来ても何もできず、申し訳ない」と自分を責める人が多くいます。でも、被災者の方々は「遠くから来てくれるだけで本当に有難い。私達を忘れず一緒にいてくれるだけで嬉しいよ」と言って下さっています。共にいる事。共に憶える事。それで十分だと。

私が参加した団体では、毎日朝と晩にその日の経験や情報を報告し合います。人によって、１日だけの参加や数ヶ月に渡る人もいます。その人達が情報交換をするだけで、どれだけ心に余裕ができ、また癒しがもたらされるか。被災地では、一歩宿舎を出ると非現実的な過酷な光景、臭い、音があります。そこで他者との触れ合い無しに生きていく事は私たちの精神を疲弊させます。でも、そのような状況下で、人は他人であっても衣食住を共にし、コミュニケーションをとり、お互いにケアし合う事で、無意識の内に非現実の世界から得た辛さが体内から放出されて、前へ進む勇気と希望がそこに新しく宿るのです。

ある日、床下のヘドロをかき出すという作業をしました。それまでヘドロかき出し作業は何回かしましたが、床がはがされていて明るく広い所での作業でした。その日は、床下の真っ暗で体一つ分だけしかない細長い道の中を匍匐前進で進んで帰って来なくてはならない作業でした。この暗さと狭さが、私の体を強張らせ、やる気はあるのに体が前へ進みませんでした。「怖い…怖い、中に入って出て来れなかったらどうしよう。中に進んでる時に地震が来て、津波が来たらどうしよう」そんな時、普段は人前に出たがらない仲間が４月なのにクリスマスの歌を大声で唄って励ましてくれました。皆、共にいることを身体の芯から感じ、前へ進むことができた体験でした。

人には得意不得意があり、与えられている使命もタイミングも違います。でも、生きている時は、何かができます。それは必ずしも現地へ行く必要はなく、自分が今、置かれている場所で出来る事が必ずあるはずです。他人を自分のように愛する、赦す事はその内の一つです。今、この瞬間を大切に、皆で笑い合いながら生きる生き方だと信じます。

（聖和大学人文学部英米文化学科卒業生）

## ●STAND UP TAKE ACTION

国連開発ミレニアム目標実現のために、10 月 1 日から 17 日まで、貧困を終わらせるために「立ち上がる」＝STAND UP TAKE ACTION が世界同時に行われます。関西学院上ケ原キャンパスでは、10月13日（木）の昼休み、12時50分より、中央芝生に集合し、“STAND UP TAKE ACTION”のイベントを行います。

STAND UP TAKE ACTION は、貧困解決のための世界的キャンペーンです。
2000 年に 189ヵ国のリーダーたちはミレニアム開発目標（MDGs）に合意しました。2015 年の期限までに、「世界の貧困人口を半減する」など、具体的な 8 つの目標達成を目指すものです。そこで、STAND UP TAKE ACTION は、世界貧困デー前後に、貧困解決を求める意志を示すために「立ち上がり」（STAND UP）、「行動する」（TAKE ACTION）ことを呼びかけます。2009 年は世界各地で 1 億 7000 万人以上がこのキャンペーンに参加し、2010 年には世界 74 ヵ国、日本では 47 都道府県で実施されました。年に 1 回のキャンペーンに、あなたも参加しませんか。

## ●宗教活動委員会　第 2 回教育研究部サロン

「大学におけるキリスト教主義教育の実践と新たな可能性」
～社会学部、法学部の取り組みに見る「学生とキリスト教との出会い」～

と　き：10 月 20 日（木）18:00～20:00
ところ：関西学院高等部　視聴覚室（3 階）
報　告：打樋啓史（社会学部准教授・宗教主事）
　　栗林輝夫（法学部教授・宗教主事）

## ●ランバスチャペルアワー

学部の枠を超えて集まった学生主体のチャペルがランバスチャペルアワーです。秋学期の予定は以下のとおりです。

10 月 25 日（火）
11 月 15 日（火）

いずれもランバス記念礼拝堂（西宮上ケ原キャンパス）にて 10:35～11:05

## ●大阪梅田キャンパスチャペル

阪急梅田駅から徒歩すぐ、アプローズタワー 14 階の大阪梅田キャンパスでは、授業期間中の毎週金曜日にチャペルアワーを開催しています。
（18:00～18:20　1405 教室）

10 月 14 日（金）樋口　進（宗教センター宗教主事）
10 月 21 日（金）田淵　結（教育学部宗教主事、宗教総主事）
10 月 28 日（金）アンドレアス・ルスターホルツ（文学部宗教主事）

## ●使用済み切手収集にご協力ください

本学では日本キリスト教海外医療協力会（ＪＯＣＳ）切手部の活動に協力し、使用済み切手の収集をしています。通常切手も対象としていますのでどうぞ吉岡記念館常設の回収箱にお届けください。

## ●盲導犬育成のためご協力お願いします

関西学院宗教活動委員会は、目の不自由な方々の社会参加促進を願い、社会福祉法人「日本ライトハウス」の募金活動に協力しています。吉岡記念館事務室はじめ募金箱を用意しておりますので皆様の温かいご協力をお願いいたします。